

母性看護学実習において看護学生の自己効力感に影響を与える要因（文献レビュー）

Factors Influencing the Self-efficacy of Nursing Students in Maternal Nursing Practice (Literature Review)

戸田 美幸¹⁾
Miyuki Toda

キーワード 母性看護学実習, 看護学生, 自己効力感, 文献レビュー

Key Words maternal nursing practice nursing students, self-efficacy, literature- review

抄 録

目的 母性看護学実習における自己効力感に影響を与える要因の具体的内容を文献から明らかにする。また、学生の自己効力感を高める教員の関わりについて考察を行う。

方法 医学中央雑誌（ver.5）にて、「母性看護」or「母性看護 and 臨床・臨地実習」and「自己効力感 or セルフエフィカシー」をキーワードにして国内の文献を検索した。

結果 母性看護学実習における看護学生の自己効力感に関して、「事前学習」「遂行体験」「他者からの評価」「環境」「属性」の5つの要因があげられた。

考察 教員は学生が遂行行動の達成が行えるよう事前学習の機会を提供すると共に、実習中の看護実践における個々の成長を客観的に言葉で伝える。また、代理的体験、生理的・情動的体験が行えるよう実習先や学生間との調整を行い、実習環境を整える。5つの要因は独立したものではなくそれぞれが関連し合い、自己効力感に影響を与えていた。

I. 諸 言

自己効力感とは、行動を起こす前に個人が感じる遂行可能感であり、やりたいと思っていることの現実可能性に関する知識である。具体的には、「自分にはこれだけのことができるのだ」という主観的な判断であり、この高低が心理的適応に影響すると共に行動との関連が深いことが一般的に知られている。Bandura は、自己効力感とは4つの主要な影響力によって育てることが出来るとし、遂行行動の達成（自分で行動し成功体験を得ること）、言語的説得（他者からほめられたり、よい評価をされること）、代理的体験（他者の体験を見本にすること）、生理的・情動的体験（行動に伴う感情や気分）をあげている。そして、これらをうまく組み合わせていくことで自己効力感が高まると述べている（Bandura 1995）。

母性看護学実習は、短い期間に母子2人を同時に1人もしくはペアで受け持ちをする。母性特有の知識や技術を用いながら、日々ダイナミックに

変化をしていく母子をウェルネス思考でアセスメントし看護展開を行っていくため、他の領域とは異なる一面が学生にとって不安やストレスを生じやすいのではないかと考える。

藤岡ら（2001）は、臨地実習の最大の目的は、学生の看護に対する関心と意欲を高めることであり、小さいことでも成功体験をもつことができれば、学生は次の課題に挑戦できるといい、実習における学生個々の体験が豊かでより効果的なものとなり、その体験を通じて学生の自己効力感を高めるための教育方法を考え、実践していく必要がある（豊嶋、堤 2005）。

臨地実習で学生が自己効力感を高めることができれば、次の課題へ挑戦するための行動に繋り、対象者のためにより良い看護の提供の提供を行う意欲へと繋がっていくと考える。

上記の背景をふまえ、本研究では母性看護学実習において看護学生の自己効力感に影響を与える要因を文献から明らかにし、学生の自己効力感を

1) 聖泉大学 看護学部 看護学科, School of Nursing, Seisen University

* E-Mail iwasa-m@seisen.ac.jp

高める教員の関わりについて検討する。

II. 研究目的

母性看護学実習における自己効力感に影響を与える要因を文献から明らかにし、学生の自己効力感を高める教員の関わりについて検討する。

III. 方法

1. 文献検索方法

医学中央雑誌（医中誌 web 版 Ver 4.）を検索エンジンとし、「母性看護」or「母性看護 and 臨床・臨地実習」and「自己効力感 or セルフエフィカシー」をキーワードにして国内の文献を検索した。文献の種類は2003年から2015年までに国内で発表された原著論文とした。その結果16件が該当した。該当した文献から妊婦・子育て・助産師・母親学級を対象とした文献、学生の自己効力感に関連しない文献計8件を除外した8件を文献対象とした。

2. 分析方法

母性看護における自己効力感に影響する要因に注目して概観し、対象となる文献を①発表年、②研究目的、③研究方法、④研究対象、⑤結果ごとに一覧表を作成した。（表1参照）そして、結果から抽出された自己効力感に影響した内容を抽出し、類似性に基づき分類・分析した。（表2参照）

V. 結果

研究内容を検討した結果、質的研究は4件、量的研究は4件であった。研究対象は全て学生であった。自己効力感に影響する要因に着目して読んだところ、事前学習、行動の達成、他者からの評価、実習環境、属性の5つが要因として挙げられた。それぞれ要因について、以下に述べる。（表2参照）

1. 事前学習

磯山、渋谷ら（2013）は、母性看護における看護実践能力を高めるために臨地実習前の演習としてロールプレイングを取り入れた。学生は、医者や褥婦・家族などそれぞれの立場に立つことで対

象理解を深め、実践を通じて具体的な援助方法や援助関係を形成する方法を理解するなど実践方法理解の拡大を図っていた。これらの体験による学生の成功体験が自己効力感を高め、学習への自信や意欲を促す一助になったと推測されると報告している。佐々木ら（2002）は、臨地実習前には不安が高く、高いSE（セルフエフィカシー）は状態不安を低下させる作用があり、実習前に成功体験を積みSEを高めておくことが重要と考えた。そこで、母性看護事前学習を行いその効果を検証した。その結果、母性看護自己効力感は、学内実習前に比較して、学内実習後、臨地実習1週間後、臨地実習2週間後、臨地実習3週間後では有意に高まっていた。さらに、実習に入ってから有意な上昇は認められなかった。状態不安と特性不安を測定するSTAIは臨地実習が近づくにつれて高まり、実習を経験すると有意に低下した。母性看護FNE（他者からの否定的な評価に対する恐れ）は、実習を経験しても暫くは上昇し、徐々に元の水準に低下した。

2. 遂行行動の達成

平野ら（2005）は、学習目標に沿った援助や、受け持ち褥婦に対して看護過程に沿った実習展開を学生自身が主体となって実施できたことが自己効力感尺度を高めることに寄与したと推測されると報告している。神谷ら（2008）は、前もって準備していたこと（沐浴の練習や授乳方法の学習、保健指導案の準備など）が実践し上手に行えたことが成功体験に繋がったと述べている。布施、本多（2005）は、沐浴が実習体験の中で一番自信になっており、日々行なうなかで自分の技術の成長が新生児の反応からみられ、自信に繋がったのではないかと述べている。そして授乳時の援助や乳房ケアについては、最初はよく理解できないことも触れながら学び、解る事から援助し、日々の援助の範囲を広げていくことで自信に繋がっていったとしている。川崎ら（2005）は、対象理解と高いコミュニケーションを必要とする保健指導が行えたことは自信に繋がり、自己効力感を高める要因になったと報告している。また初産婦を受け持つことも、自己効力感を高める要因になったと述べている。看護学生が母親から訴えられた疑問や未熟な育児の状況を観察し指導や助言を行うことで、育児がスムーズに行えるようになるといった

変化が見られやすいことが自信となっている。

分娩に対して川崎ら（2005）は、分娩に立ち会うことができた学生のほうが、自己効力感が上昇する傾向がみられたと報告している。マッサージなどのケアを通じ、産婦に感謝され自分が産婦の役に立てたという成功体験が、自己効力感が高まることに繋がったのではないかと推測している。布施、本多（2005）も同様に、分娩中のケアを通じ、分娩後に学生の存在の大きさを対象から感謝の言葉で返されることで学生は成功体験を感じたと述べている。神谷ら（2008）は分娩の立会いは他では経験できないことが出来たという新たな体験であり、学生の満足感・達成感を得たと報告している。また分娩期の関わりにより、産婦からの感謝の言葉を通じて看護する喜びを獲得し、教科書だけでは理解しにくい内容を実際に目で見て感じることで、学べたという達成感や満足感を得ていた。そして、同じ空間にいて母親の気持ちを追体験し、母親との一体感を感じていた。また、生命が誕生したことへの感動や自分の将来の姿をイメージし満足感・達成感を得ていたと述べている。

3. 他者からの評価

分娩に立ち会うなかで、腰をさするなどの行為しかできなかったとしても、お礼の言葉を述べられる（川崎ら 2005；神谷 2008；布施、本多 2005）ことが自信や達成感に繋がっていた。布施ら（2005）は、産褥期の関わりに関して精一杯関わることが退院時に褥婦から感謝の言葉を返されることに繋がる。対象からの肯定された援助が学生自身の成功体験になり、自己肯定から看護についての自信につながったと述べている。

神谷ら（2008）は、対象者から以外にも、沐浴の際や外来妊婦に対してパンフレットを作成した際に指導者から褒められるなど、実践後の指導者からの肯定的なフィードバックが看護する喜びを獲得することに繋がり、学生の達成感・満足感に影響したと報告している。

4. 実習環境

柴田、柏木（2012）は、実習前の事前学習と実習中において、実習グループの人間関係の良否が学習促進に影響していた。また、実習中の病棟スタッフの学生への関わりの良否も、学習促進に影響

していたと報告している。

5. 属性

岩谷（2012）は、男性より女性、専門学校より大学教育課程、入学前に職歴のあるものは実習前後で自己効力感に有意差はなく、職歴のないものは実習前に比べ実習後のほうが自己効力感尺度の得点が高く有意差があった。実習時期による実習前後での自己効力感の差はみられなかったと報告している。

VI. 考察

1. 自己効力感に影響する要因と自己効力感を高める教員の関わりについて

看護学生（以後学生と記す）が行動を起こすことに対して山崎ら（2000）は、行動の達成が自己効力感を高める一番の要因になったと報告している。そして、行動の達成が自己効力感を高め、自己効力が高まることによって意欲が高まり、課題の達成が容易になるという相乗効果が考えられると述べている。「できた」「できなかった」という成功や失敗の体験は自己効力に大きく影響し、「できた」という体験の蓄積が、「自分にはできる」という自己効力を生み出してくる（穴井ら 2003）。

学生は患者との関わりを通じて、授業では理解が難しかったことが「分かった」、練習したことが「できた」、看護展開し個別性のあるケアを実践しケアの効果が「確認できた」といった、自身が努力を重ねることにより「できた」という体験を通じて自己効力感を高めていていることが研究結果からも示唆された。「できた」という思いで喜びを感じ、喜びが「もっとよい状況になるにはどうしたらよいのだろうか」といった次の課題に対する学習意欲となると考える。

遂行行動の達成について Bandura（1980）は、人は自分自身で行動基準を設定し、その基準に照らして自分自身の行動を評価すること、以前の自分の行動が今現在の遂行行動を判断する準基準として設定され、それが自己評価に影響することを指摘している。これは、個人によって「できた」と受け止めるレベルが異なることを意味している。そのため教員は学生のレベルにより達成可能な小さな目標から大きな目標まで共に設定し、達

表 1 自己効力感に影響を与える内容について記載された文献の概要

	タイトル	著者	出版年	雑誌名	目的	研究方法	対象	結果
1	母性看護学における看護実践能力を高めるための教育方法の検討 ロールプレイングを取り入れた演習の評価	磯山あけみ他	2013	母性衛生54巻2号, 379-386	ロールプレイングを取り入れた演習の効果を評価する	課題グループレポートと、演習に対する自己評価に質問紙を用いた。	看護系大学において母性看護学を履修している学生87名	母性看護過程にロールプレイングを取り入れ、学生がその役割を演じることで対象理解の深化を促すとともに、母性看護実践方法理解の拡大につながり、既存の知識・技術を活用し、母子とその家族を適切にアセスメントしニーズに応じたケア提供の達成などの理論と実践の統合の達成をもたらし、学生自身の自己効力感を高める一助となった。
2	母性看護学実習において知識獲得に影響する要因	柴田文子他	2012	横浜創英短期大学紀要84号, 59-63	母性看護学実習において知識を獲得するために影響する因子を調査する	実習前後での母性領域に関する知識試験の実施、実習前後で質問紙を用いてアンケートを実施。	3年過程の短期大学看護学科で母性看護学実習を行った学生62名	知識試験に関して、実習前後では実習後のほうが平均点が高く、特に実習で経験できた分野の平均点の伸びが大きかった。実習前の試験の得点と、「事前学習が十分であったか」「実習グループの人間関係の良否」に正の相関があった。実習後の試験の得点と「スタッフの関わり方の良否」に相関があった。「スタッフの関わり方の良否」と「対象との人間関係に良否」「実習場の指導体制の良否」「実習場で自由を感じた程度」「教員の関わり方の良否」「実習中の自己の努力の程度」は正の相関、「実習中の困難の有無」は負の相関があった。男女別では実習前の母性看護実践に対する自己効力感に有意差はなかったが、実習後は女性の得点が高く有意差があった。大学と専門学校では実習前には有意差がみられず、実習後は大学の得点が高く有意差があった。入学前職歴の有無では、職歴ありは前後で得点は高いが有意差はなく、職歴なしは実習後の得点が高かった。実習期間(1年間のローテーション実習でどの時期に母性実習にいったか)では、最初・中間・最終実習期間では実習前後とも差はなかった。
3	看護学生の母性看護実践に対する自己効力感、母性看護学実習前後の比較	岩谷久美子	2012	医学と生物学156巻9号, 646-649	母性看護実践に対する自己効力感の現状を把握する	自己効力感尺度を用い、実習前後で測定、性別、教育課程、実習時期などで比較検討を行った	4年制看護大学3校と3年制看護専門学校4校の7校の学生(288名)	母性看護学実習において看護学生が感じる満足感・達成感を得られる要素として、「母性看護における新たな体験」「母性看護特有の技術の成功体験」「看護する喜びの獲得」「体験をとおして知識を実感」「母親との一体感」「未来の自分をイメージ」人間の営みへの感動」の7つが抽出された。看護学生が感じる満足感・達成感に「母性看護における新たな体験」が起点となる。そのため教員・指導者は新たな体験が機会もてるよう調整を図り、成功体験が実感できるよう、実習前後の関わり方の重要性が示唆された。
4	母性看護学実習における看護学生が感じる満足感・達成感の分析	神谷美樹他	2008	九州国立看護教育紀要10巻1号, 8-15	満足感・達成感を得られた学生の具体的な要因を分析する	アンケート調査で、実習で達成感や満足感を得られた場面、その時に学生が感じたことや思ったことについて記述してもらった	3年過程の看護学校2校の実習を終了した看護学生3年生151名	母性看護学実習に関するSEを高めるために、3週間の実習の最初の2日間を学内事前実習として組み込んだ。特性傾向である一般性SEと特性不安と一般性FNEには影響を及ぼさなかった。母性看護SEは、学内事前実習の前後で有意に高まった。状態不安は学内事前実習終了後の臨地実習直前に高まり、実習を経験する過程で低下した。母性看護FNEは、状態不安が低下しても未だ高まり、その後低下した。
5	看護臨地実習における学内事前学習がセルフエフィカシーに及ぼす影響、母性看護学実習の場合	佐々木和義他	2003	ヒューマン・ケア研究3-4巻, 22-29	学内での母性看護事前学習が、母性看護SEを高めるのか、状態不安を低めるのか、母性看護に対するFNEを低めるのか検討する	1. 母性看護SE尺度、FNE尺度の作成 2. 1とGSES、FNE尺度を用いて実習前、中、後と比較・評価した	看護大学の2年生女子18名	自己効力感尺度全体と授業過程評価スケール下位尺度では、「学生-患者関係」において比較的強い相関関係、「学習内容・方法」「カンファレンスと時間調整」「学生-人的環境関係」「目標・課題の設定」において弱い相関がみられた。「学習内容・方法」の得点は、自己効力感尺度得点が実習後に上昇・下降した群の2群間に有意差がみられた。「学習目標」としていた援助の実施「受け持ち患者に対する看護過程に沿った実習」「既習内容を活用した実習展開」において有意差がみられた。
6	母性看護学実習における自己効力感を高める要因に関する研究(第2報)学生による授業過程評価の関連	平野美樹子他	2005	日本看護学会論文集：看護教育36号, 134-136	母性看護学実習において、いかなる学習環境や指導のあり方が学生の自己効力感を促進するのか検討する	患者との関わりにおける看護学生の自己効力感尺度(実習前後で使用)、授業過程評価スケール(看護学実習用)を測定。	3年過程看護専門学校3年生109名	実習前後での自己効力感得点は、上昇群70.4%、下降群29.9%。実習中に実施した看護として記述された内容を分析し、「保健指導」「身体的ケア」「精神的ケア」の3つに分けた。それら3項目において、自己効力感尺度の上昇群・下降群に有意差はなかった。分娩に立会った学生は、自己効力感が上昇する傾向がみられた。受け持ち褥瘡の分娩回数、産褥期の関わり有無、受け持ち日数、受け持ち人数において、上昇群・下降群に有意差はなかった。自己効力感尺度の下位尺度得点の受容的態度・専断的態度得点では、上昇群・下降群において有意差のあった項目はなかった。専門的態度得点では、保健指導が出来た学生、初産婦を受け持った学生が上昇群に多かった。
7	母性看護学実習における自己効力感を高める要因に関する研究(第1報)実習における学生の経験との関連	川崎郷子他	2005	日本看護学会論文集：看護教育36号, 131-133	実習前後の自己効力感の変化に影響を及ぼした要因を学生の学習中の経験から明らかにする	患者との関わりにおける看護学生の自己効力感尺度を測定、実習中の経験について、自由記述または質問形式にて回答を求めた	3年過程看護専門学校3年生109名	実習の中で自信のついた経験は一番多かった項目は沐浴であった。次に多かったのが分娩期の関わり、産褥期の関わり、授乳時の援助、マッサージ、乳房ケア、子宮底測定、おむつ交換と続いた。学生が体験を通して自分自身の力を実感したり、対象者から援助を肯定されることは学生の自信や達成感となり、自己肯定感や自己効力感を育むことができていることが分かった。
8	母性看護学実習における看護体験と学び 実習後のアンケートより	布施明美他	2005	神奈川県立大学看護専門学紀要2号, 48-54	母性看護学実習の実習終了後のレポートとアンケートから学習状況と課題を把握し、効果的な実習の在り方について検討する	実習終了後のレポート(学びと感想)の内容を分析した。実習終了後に体験技術アンケート調査を実施し内容の分析をした。	看護専門学校3年生80名	

成するごとに評価を行っていく関わりが大切であると考え、これにより、学生は誰かと競い落ち込むことなく、個々のレベルに応じて「できた」という体験を積み重ねていくことが可能になる。

分娩に関して笹野ら(2010)は、分娩を見学することで母性観は肯定的になると述べているように、分娩期の関わりは自己効力感を高めるだけでなく、対象者や自分自身への興味関心を高める機会になっていると考える。そのため、教員は分娩の機会が得られるように指導者と調整していく必要がある。今泉ら(2008)は、一人の学生が体験することで学習効果が得られることが示唆されたと述べており、分娩見学の機会が得られなかったとしても、カンファレンスを通じて学生同士が経験の共有をはかれる時間を作っていく必要があると考える。

分娩経過や産褥・新生児期の経過は刻々と大きく変化をしていく。そのため、日々の経過を事前に理解できていなければ、その変化を追っていくこと自体に時間を要し、今後の予測を行うことや

ケアに結び付けていくことが困難になってくる。

奥津ら(2002)は、新たな課題(実習)に立ち向かう時、類似の課題に取り組み成功した体験(学内での事前学習)は自己効力感に有効に作用することを、特発性自己効力感尺度を用いて実証している。実習環境と類似の状況を設定することで、理論と実践の統合が図られ成功体験を感じることができ、その後の学習意欲を促すことへと繋がっていくことが本研究からも裏付けされた。これらのことから教員は、実習前の学習を事例検討に終わることなくロールプレイングも取り入れて、対象理解や実践方法の拡大をし、学生が実習で成功体験を持てるように準備を行うことが大切であると考え。

他者からの評価の記述内容では、学生が初めての体験である分娩見学や産褥期の関わりを精一杯行うなかで対象者や指導者から評価され、自己効力感を高めていた。本人の行動に対する努力を認め、能力があることを言語や態度で支援することは言語的説得といわれ、そのことにより自己効力感が高まると報告されている(穴井ら 2003)。

更に言語的説得だけによる自己効力への影響力は限界があり、成功体験とあわせて使用することによって効果が上がるといわれている（安酸 2000）。学生と一番間近で接し、個々の成長の具合を把握しているという点では、教員は学生に対して細やかな評価を与えることができる存在であると考え、その点において、常に学生がどのようなことを考え努力をして日々の看護を行っているのか見守り、学生が自分自身では気づいていないかもしれない日々の成長を客観的に言葉で伝えることが、学生の自信へと繋がっていくと考える。

学生が実習中にのびのびと発言ができ対象者へ看護を実践することができたと思うには、実習環境も大切であると考え、結果のなかで、母性看護の知識獲得には実習グループの人間関係や病棟スタッフとの関わりの良否が影響していた。（柴田、柏木 2012）。また、性差や学習施設・入学前の職歴によって自己効力感に差が生まれていた。（岩谷 2012）豊嶋、堤（2005）は、看護師や友人、教員、他職種からの好ましい態度や技術からの学び、母親からの影響によって自己効力感が高まり、看護師の好ましくない態度は反面教師にとらえ、友人と自分を比較することによって自己効力感が逆に低下すると報告している。友人や看護師の態度から学び、病棟スタッフの関わりの良否によって学習しやすい環境が整い積極的に実習が行えるといった意味において、結果から導き出された要因の環境・属性は Bandura（1995）の理論の代理的体験、生理的・情動的体験にあたると考える。教員は、実習指導者との関係性に関し

て、学生が過度な緊張感を持つことで思うように発言や看護実践が行えないことがないように、指導者と学生の間に入り両者の関係性を維持できるように努める。また、学生同士が良好な関係を保ち相互の援助関係が円滑にいくように、グループ全体を見守りサポートを行っていく必要がある。そして教員も学生にとって見られている立場であることを自覚し、看護や指導にあたる必要があると考える。

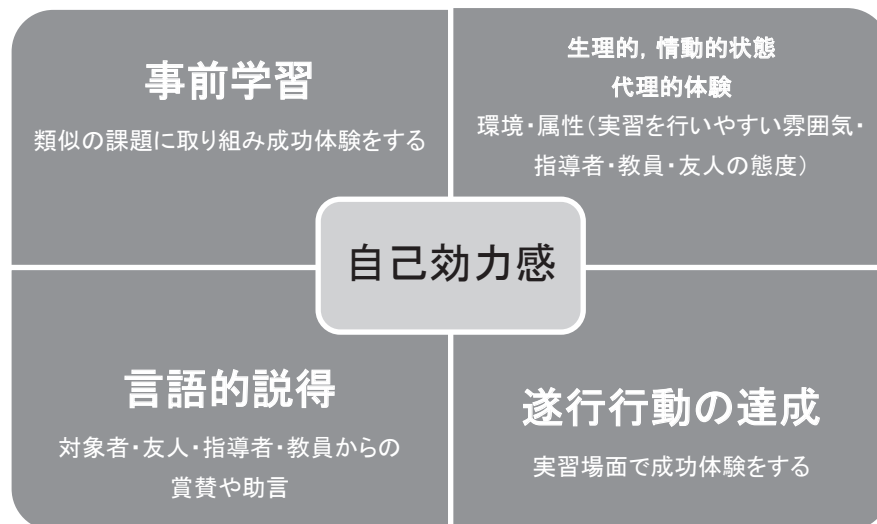
2. 自己効力感に影響する要因同士の関係性について

自己効力感に影響する要因として、事前学習、遂行行動の達成、他者からの評価、実習環境、属性が挙げられた。事前学習を通じて実習時の技術や看護過程の展開についての自信を持たせることや、実習を行いやすい環境・属性を整えることが、生理的・情動的状態として実習への原動力となり、自己効力感に影響していた。そして、実際に実習場面で対象者を理解し援助を行うなかで成功体験をすることが、自己効力感を高めていた。また、対象者・友人・指導者・教員からの賞賛や助言が言語的説得、環境としての指導者・友人の態度が代理的体験となり、自己効力感に影響をしていた。

VII. 結 論

母性看護学実習の自己効力感に影響する要因として、事前学習、遂行体験、他者からの評価、環境、属性の5つがあげられた。それぞれの要因は

図1 自己効力感に影響する要因同士の関連性について



独立したものではなく関連し合い、自己効力感に影響を与えていた。

母性学実習における指導について、考察で述べた自己効力感を高める教員の関わりについて実践を行い、実際に学生の自己効力感を高めることができたかについて検討を行うことが、今後の課題である。

付 記

本研究は、聖泉大学看護学部研究助成費の助成を受けて行った。

文 献

穴井めぐみ、太田祥恵、前田かおり（2003）：急性期実習における看護学生の自己効力感を高める要因の検討，第34回看護教育，23-25。

アルバート・バンデューラ（1995）／本明寛，野口京子（2015），激動社会の中の自己効力，179-204，金子書房，東京。

布施明美，本多千恵子（2005）：母性看護学実習における看護体験と学び 実習後のアンケートより，神奈川県立よこはま看護専門学校紀要，2号，48-54。

藤岡完治，安酸史子，村島さい子，他（2001）：学生とともに創る臨床実習指導ワークブック（第2版），8-9，医学書院，東京。

平野美樹子，金子吏子，佐久間久美子，他（2005）：母性看護実習における学生の自己効力感を高める要因に関する研究（第2報）—学生による授業評価との関連—，日本看護学会論文集：看護教育，36号，134-136。

今泉玲子，檀原いづみ（2008）：母性看護学実習における学生に看護実践の現状と今後の課題，看護・保健科学研究誌，8（1），199-204。

磯山あけみ，渋谷えみ，坂間伊津美，他（2013）：母性看護学における看護実践能力を高めるための教育方法の検討ロールプレイングを取り入れた評価の演習，母性衛生，54（2），379-386。

岩谷久美子（2012）：看護学生の母性看護実践に対する自己効力感 母性看護学実習前後の比較，医学と生物学，156（9），646-649。

神谷美樹，高杢裕子，小原まゆみ，他（2007）：母性看護学実習において看護学生が感じる満足感・達成感の分析，九州国立看護教育紀要，10（1），8-15。

川崎郷子，平野美樹子，川上久美子，他（2005）：母性看護学実習における学生の自己効力感を高める要因に関する研究（第1報）—実習における学生の経験との関連—，日本看護学会論文集：看護教育，36号，131-133。

奥津文子，片山由美，大矢千鶴，他（2002）：効果的な臨地実習指導方法—学生の自己効力感の変化と実習満足度からの一考察—，京都大学医療技術短期大学部紀要，22，33-41。

佐々木和義，門脇千恵，池内佳子，他（2003）：看護臨地実習における学内事前実習がセルフエフィカシーに及ぼす影響：母性看護学実習の場合，ヒューマンケア研究，3-4巻，22-29。

笹野京子，長谷川ともみ，堀井満恵，他（2001）：母性看護学実習における母性意識の変化，富山医科薬科大学看護学誌，第4号，41-51。

柴田文子，柏木恵子（2012）：母性看護学実習において知識獲得に影響する因子，横浜創英短期大学紀要，8号，59-63。

豊嶋三枝子，堤かおり（2005）：看護学実習における学生の自己効力感に影響する要因，日本看護学教育学会誌，14（3），19-30。

山崎幸恵，百恵由美子，阪口しげ子（2000）：看護学生の臨地実習前後における自己効力感の変化と影響要因，信州大学医療技術短期大学部紀要，26，25-34。

安酸史子（2000）：学生とともにつくる臨地実習教育—経験型実習教育の考え方と実際—，看護教育，41（10），814-823。